

ザンジバル・ストーンタウンにおけるアラブ移民ハドラミーの社会階層性

——血縁ネットワークと揺らぐアイデンティティをめぐって——

平成18年入学

派遣先国：タンザニア

朝田 郁

キーワード：東アフリカ，アラブ，ハドラミー移民，インド洋，ダウ

対象とする問題の概要

インド洋に面した東アフリカ，アラビア半島，南アジア，東南アジアの諸地域は，海洋交易活動を通して相互に結びつき，紀元前後より人や物の交流がさかんに行なわれてきた。これを背景として，多数のアラブ人がオマーンやイエメンからダウと呼ばれる帆船に乗り，東アフリカに來航していた。アラブとの交渉の結果，東アフリカ沿岸部では各地にイスラーム化した都市が建設され，その中でもタンザニアのザンジバルと呼ばれる島は，この地域におけるイスラーム文化の拠点となってきた。

ところが1964年にザンジバルで革命が起こると，政治，経済，文化の各分野において主導的立場にあったアラブが放逐され，アフリカ系住民を主体とする政権が樹立された。新政府は社会主義を掲げイスラーム勢力を弾圧したため，それまでの社会秩序は根底から転換された。この流れの中，アラブ移民のアイデンティティは，現地人との同化とアラブ的な価値観の保持の間で揺れ動いている。

図1 インド洋を進むダウ船.



研究目的

本研究は、東アフリカのザンジバルにおいてイエメン人移民たちが持つ超国家的ネットワークを、イスラーム的価値観、血統、社会階層、アイデンティティを軸に考察することを目的としている。

ザンジバルのアラブには、オマーン系とイエメン系がいるが、前者は割合としては限られている。後者はインド洋の各地に移住し、定着先のイスラーム化を進めるなど現地社会と深く関わってきた。これらイエメン系移民は、イエメン東部地域ハドラマウトの出身であるためハドラミーと呼ばれる。

ハドラミーはアフリカからアジアまで広範囲に移住しており、相互に深い結びつきを保っている。そこで本研究では、この血縁を軸とした彼らのネットワークに注目する。ハドラミーの共同体には、歴史的経緯から階層区分があったが、この構造が定住先の近代化とイスラームへの回帰運動によって揺らいでいる。そのことが、彼らのネットワークのありかたにどう影響するのかを明らかにしたい。

図2 ハドラミー移民の個人史に耳を傾ける。



フィールドワークから得られた知見について

フィールドワークは、2011年10～12月の3ヶ月間にわたった。調査の内容は、州立文書館における記録資料調査と、ザンジバルの都市部に暮らすハドラミー移民に対する聞き取り調査が中心である。

調査の成果としては3点挙げられる。1点目は記録資料である。ハドラミーはインド洋に蒸気船の定期航路が導入された19世紀以降も、木造帆船のダウで東アフリカ沿岸部に渡っていた。そのことに関して、ザンジバルに入港したダウ船のレポートが入手できた。この資料には、各ダウ船の到着日、名前、出港地、積載物、搭乗者などが詳細に記録されている。本格的な分析はこれからだが、資料を概観したところ、イエメンからの直航よりもケニアやソマリアの経由便が多かったことが分かった。

2点目はインタビューでの成果である。ハドラミーの移住のピークが、19世紀末から20世紀初頭であるため、私の過去の調査では移民の子・孫世代が情報提供者となっていた。しかし、今回の調査で第一世代の移民もわずかながら存在することが分かり、移住の背景について話を聞くことができた。

一例を挙げれば、交易路があるとはいえ、2500km もの海路をダウ船で旅するのはかなり危険だと想像できるが、それでもハドラマウトに残るより生き残れる可能性があったという。一般に政治や経済の観点で説明される移民であるが、当事者の語る個人史は文献資料では伝わらない生々しさがあつた。

3点目は地図の入手である。従来ザンジバルの地図は、低精度な古い資料しか存在しなかったが、今回、現地の地図局で最新の測量によるデジタル地図が制作されたことが分かり、全図入手できた。私の調査ではGPSを用いた計測も行なっているため、そのデータと連動させた分析も可能になる。

今回の調査は、現地イエメン協会のサポートで、インタビュー協力者の選定やアクセス困難な施設訪問も実現した。調査対象者も、実業家から宗教指導者まで多岐にわたり、充実した内容であつた。

図3 ザンジバルの目抜き通りの賑わい。



今後の展開・反省点

調査には反省がつきものである。例えば、ハドラマミー共同体の中には、イスラームの創始者である預言者ムハンマドの家系出身者がいる。私は過去の調査の経験から、彼らにこそ海外の同族との強いつながりがあり、その他の部族出身者は現地社会と同化が進んでいるという素朴な理解をしていた。しかし今回、時間をかけてハドラマミーの個人史を聞いた結果、それが思い込みに過ぎないことが良く分かった。研究を進める上で、自分が偏った考えに執着していないか、常に省みなければならない。

今後の展開としては、論文の執筆と研究発表である。今回の調査による成果は、過去の調査結果と合わせて、今後の博士論文を構成する要素となる予定である。また、博士論文を書き上げる前にも、可能な範囲で調査の成果の一部を研究誌に投稿することを考えている。調査で収集した資料が多く、内容の整理と分析にはまだ時間が必要であるが、研究会なども通して研究成果を公表していきたい。